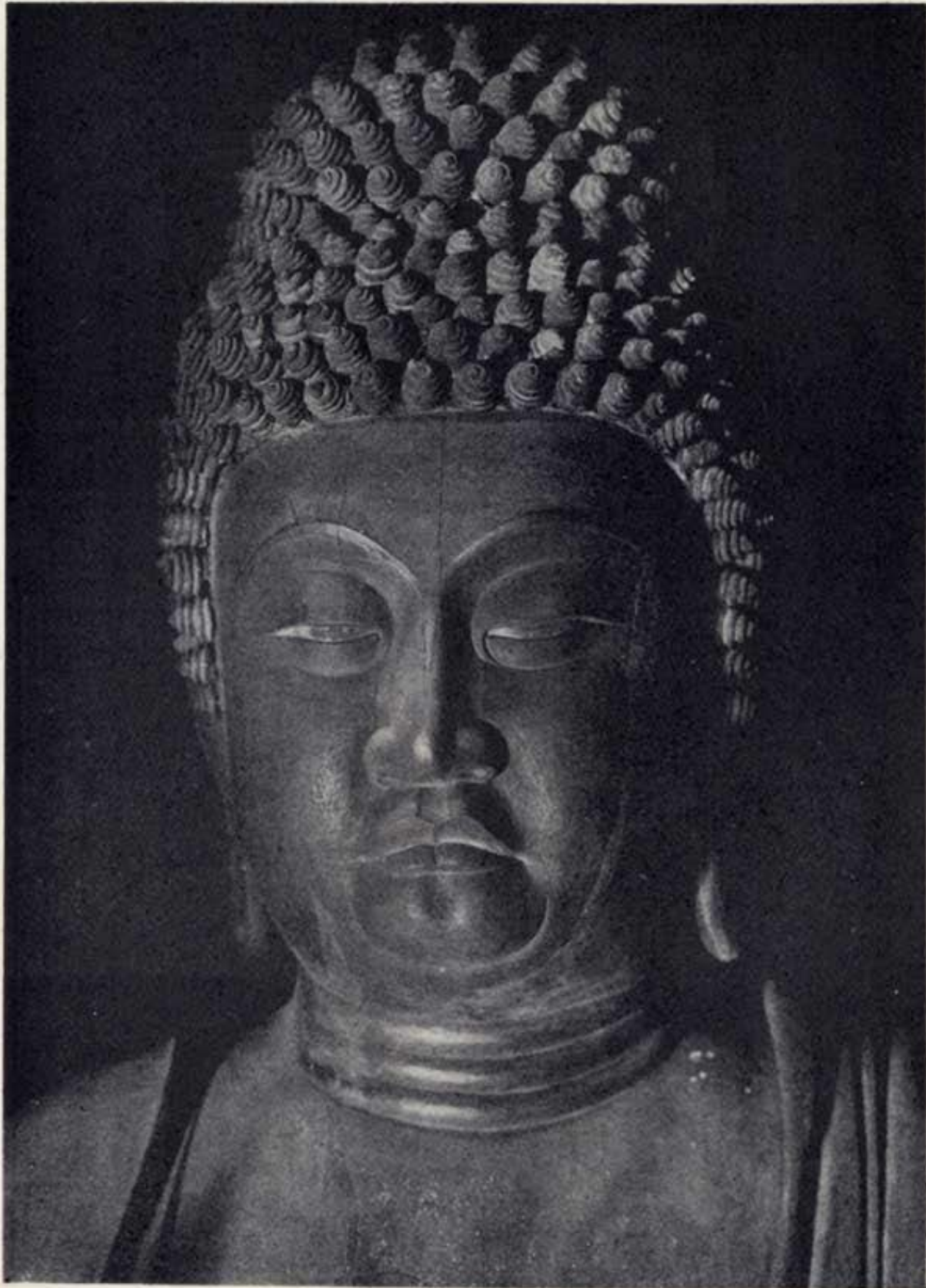


浄土

十一月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌第三五二号)
昭和三十七年十一月二十五日 印刷 昭和三十七年十一月一日発行

第二十八卷

第十一号

新版ひめくり

心のあゆみ

A判

価格 七〇円 二〇円

体裁 タテ 30 CM ヨコ 10 CM

割引 一〇部以上 一割 引

五〇部以上 一・五割 引

百部以上 二割 引

送料 実費

(百部以上より無し)

修養ひめくり

B判

価格 一〇〇円 二四〇円

(一〇部以上より割引あり)

法然上人鑽仰会

東京都千代田区
飯田町1の21

振替 東京 8 2 1 8 7 電話 (332) 5 9 4 4

浄土トラクト

大正大学教授・文博 佐藤賢順 著

再版

信仰へのみちびき

B 六版・十六頁
定価十五円 二十円

目次

- 1、大慈悲の仏教
- 2、知性を超えて
- 3、美的情感を超えて
- 4、本願の不思議にて
- 5、すべてを包む愛
- 6、人生は信ずる心から
- 7、お導びきのままに

村瀬 秀雄 著

月影抄

御法語の栞

目次

- 1、上人のご日常(われ聖教を見ざる日なし)
- 2、浄土宗の意義(われ浄土宗をたつる心は)
- 3、道を求む(かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ)
- 4、決定の信(我は鳥帽子もきぬ法然房也)
- 5、弥陀名号の功德(無礙光とは)
- 6、信仰のすがた(つみは十悪五逆のものも)
- 7、念仏を勧める(不軽大士の杖木瓦石を)
- 8、あとがき

申込先 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一ノ二一

振替 東京 八二一八七番

浄土

十一月号

問ていはく、一声の念仏と、十声の念
仏と、功德の勝劣いかむ。答ていはく、
ただおなじ事也。

法然上人御法語



中央アジアで出土。菩薩
塑像の頭部。高さ24cm。

浄土 十一月号 目次

表紙 薬師如来像(京都・神護寺)

マスコミのなかの仏教……………高橋良和(2)

教シリーズ 養老院……………川瀬法円(6)

童話 ねずみを拾った若者……………伊藤孝位(10)

随筆 慰問……………村田嘉久子(15)

三分間 結婚式……………谷部禅雄(18)

紀行文 アメリカ旅行⑤……………佐藤治子(20)

近僧代 渡辺海旭……………大橋俊雄(28)

扉の御法語……………(5)

表紙の写真……………(27)

教界トピックス……………(9)

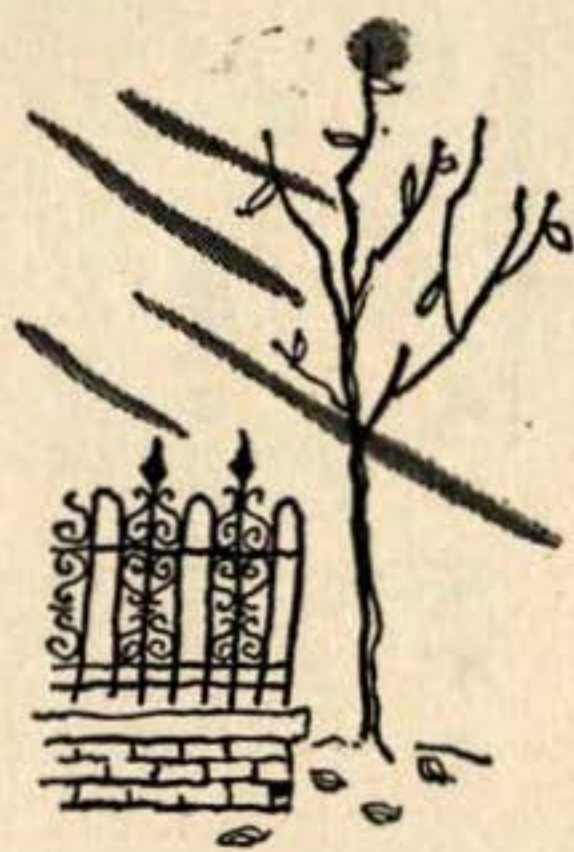
講話

浄土宗入門 その四……………戸松啓真(30)
——往生の意義について——

編集後記……………(33)

マスコミのなかの仏教

高橋良和



マスコミということばは英語のマスコミュニケーションを略したことばということばはよく承知しても、この頃はどう立派に日本語として活用され、また理解出来るようになっていく。

日々目にふれるテレビ、ラジオ、それに雑誌、新聞週刊誌などのすべてをひっくるめて、その大きな流れのなかで吾々が生活し、またそれを背景として生かされているような考えをもっている人は少くないと思うほど、マスコミは現代人の毎日の生活と切りはなせないように考えられているのである。

昔は宣伝ということばのなかにふくまれていたことはす

べてマスコミのなかにふくまれて、それと並行して発展しているのが現代である。

宣伝ということばはもともとプロパガンダということばで、接木（つぎき）というラテン語であるようで、今から五百年ほど前のローマ法王グレゴリウス十五世が作った教義宣布局で使ったことばなのである。

だからそのことばの発生からいうと、元来布教という意味なのである。味であって、もともと宗教を広めるための伝道の意味なのである。

仏教のいろいろのことばが普遍化して、普請が建築することになり、往生が困ったときの代名詞になったりしたと

同じように、この宣伝のことばは一七八九年のフランス革命のときに政治上の意見を述べるとのことばに代ったし、更に、最近に至っては、商業や商品の頒布に必要なアップルを意味するようになったのであるからその出発を考えるとなかなか面白いものである。

然もこの宣伝はどこまでも個人から出発すべきものであって、集団に訴える場合においても、そのなかの個人を対象としているのであって、その点仏教の救済と同じなのである。

宣伝は街頭にある商品を自分のものにしたいという欲求を誘発するものであり、宗教は、神や仏にすがりたいという欲求を開発する立場にある点で共通なのである。

そこで宗教本来の立場を考えてみると、どこまでも個人の救済であることを原則としているのであって、マスコミによることは宗教本来の立場ではないとする見解が強いのである。

勿論宗教は人と人との接触によるものであって、少くともマスメディアや即ち媒体による場合はその立場がくずれるという意味からであると思うのである。

然し現代において果して宗教がその立場だけを堅持して宗教は存在し得るだろうか。

ここに多少立場が異なるか、教育の場合を考えてみると、この点が理解してもらえないのではないだろうか。

教育も宗教と多少その意味は異っているが、円満なる人格の形成を目標とするのであって、勿論人と人との接触によって最大の効果をあげることが出来るのであるが、今その教育をしてよりよく効果をあげるものとして教育映画、文化映画、更にスライド、教育テレビなどがあるが、果してこれらのマスコミは教育として邪道であるかどうかを考えてみることである。これらはその製作者を通して、教育の理想を説き、そこに表現せられる教育の枠内において、一つの方向づけをして、教育をして尚一層の効果をあげようとしているし、それらの媒体は少くとも実生活のなかに教育的なものを浸透さすための大きな役割をもっていることに気づくのである。

そうであるとするならば、マスコミを活用することは教育の効果をあげると共に意識的にしろ、無意識にしろ、教育的なものの浸透に忘れてならないものなのである。

こういった点では宗教も同じなのであって、個人的救済即ちパーソナルコミュニケーションの立場をとりながら、マスコミ、即ち媒体を通した救済への働きかけをもつことも今の時代に必要なことなのではないかと思うのである。

そこで仏教の立場を考えてみたいのである。

過去においての仏教はこのマスコミと反対の立場をとってきたのである。それは極楽往生としての思想がややもすると消極的な考え方となつて、そうした媒体を通すことによって、本来の立場が崩れ去るが如く考えられていたことである。

これでは現代に息する仏教ではないのであつて、少くともマスコミを活用することによつて、仏教の教義や救済が如何に人生と結び合っているかということを知らしめることが必要なのである。

ひろい意味の仏教は、このマスコミのなかにあつて、いつも救済の手をさしのべ集団のなかの個人に向つて働きかけることを忘れてはならないのである。

単なる個人ではなしに、集団のなかの個人ということ忘れてはならないのである。

然しこの際に考えなければならぬことであるがマスコミがだんだんパーソナルコミュニケーションになってきていることである。

ラジオがだんだんトランジスタに変つてきたし、やがて、テレビもまた携帯用になってくると、いよいよ個人対個人ということに変わってきたことである。

そこでこうした場合に特に考えてもらいたいのは受け入れ側に立つことである。ややもすると仏教はいつも話し手、或は与える側にのみたつてその受け入れる側、即ち聞き手を忘れている態度をとっていることである。

人生の救済ということを目標として、まずその手がかりをどうするか、受け手に働きかける方法をもっと真剣に考えるべきではないだろうか。

興味をもちながら、聞き手の興味をひきだすこと、それを開発するところに、マスコミのなかの仏教は考えなければならぬし、その媒体を通して人生問題を開発していくことが必要なのではないだろうか。

年末・年始の施本

仏教の生活

家庭を明るく、一家そろつて
信仰に芽ばえる真心こもった
施本をおすすめします。

■A5版十六頁・一部十二円
■実費・見本三十円迄切手■

東京都文京区湯島三組町13

仏教書肆 中山書房

電話 (831) 8494 番

扉の御法語

問ていはく、一声の念仏と、十声の念仏と
功德の勝劣いかむ。答ていはく、ただおな
じ事也。疑ていはく、この事又不審なり。
そのゆへは、一声十声すでにかずの多少あ
り、いかでかひとしかるべきや。答、一声
十声と申す事は最後の時の事なり。死する
時一声申すものも往生す、十声申すものも
往生すという事也。往生だにもひとしくば
功德なんぞ劣ならん。(念仏往生要義問答)

理論はいかに難しくても、努力の積み重ね
によって他人に伝えることができます。しか
し信仰を正しく授けることは相手の器によっ
て至難なことになりました。上人が、お念
仏を一声なりと唱えれば、間違ひなく往生で
きると教えられると、それを聞いた者の心の
奥には、それなら十遍唱える必要がないだろ
うという気持がでてきます。それと同時に、
そんなわけがない、やはり少しでも数多くお
念仏を唱えた方がよいと思う心がでてきま
す。数の少いより多い方がよいと思うのは人

情の自然というものであります。

この御法語の質問者も、一声よりは十声、
十声よりは百声と、少しでも数多くお念仏を
唱えた方が勝れていると思われて仕方がなか
ったのです。上人のお詞をかえして重ねて同
じ質問をしているのも、どうにも納得がゆか
なかったからです。自分が行住座臥にお念仏
を唱え、寝てもさめても、食事のときにもお
念仏をはげんでいるのに、上人が一声も十声
も万声も、どれにも勝劣の区別がないと教え
られたことが不満であつたのでしょう。また
上人が常に「現世をすぐべき様は、念仏の申
されん様にすぐべし」といわれ、「お念仏は、
ただ数遍のおほからんにしかず」と卒直に示
されていますが、これらのお詞とも矛盾する
ように聞かれたのでしょう。

そこで上人は、一声でも十声でも勝劣なし
ということ、臨終の場合のことであるとい
われて、相手の真剣な気持を逸されました。
もちろん上人は一時逃れに申されたのではなく
十八願文を引用されて説明されたのです。
しかし相手はそれでも引き退りませんでし
た。即ちそれなら臨終のお念仏と平常のお念

仏とどう違うのですかと迫りました。その時
上人は静かに「ただおなじ事也」と答えられ
ました。そして同じ事であるとの説明にこう
申されています

平生のお念仏を唱えていても、突然に臨終
の場面となるかも知れないが、そうすれば平
生のお念仏は直ちに臨終のお念仏になるでは
ないか。またいよいよ臨終近しとお念仏を唱
えていても、幸い危篤状態を脱して生命をと
りとめることができれば、臨終のお念仏が直
ちに平常のお念仏になるではないか。

この上人の説明で、質問者は納得したでし
ょうか。いや納得どころでなく、質問者は上
人の説明を詭辯だと思いました。そこで言葉
も荒々しく「あなたは臨終の一声は、一生涯
善業を積むことより更に勝れているとでもい
うのですか」と声高く上人を詰りました。上
人は仕方なく「今申したことは念仏行者に関
係のないことなのです」と述べられました。

信仰は言葉の上の説明や議論だけでは容易
に判らぬものであります。上人のお詞を繰り
返し拝して、その中から自分なりに汲みとつ
てゆくより外はありません。



養 老 院

川 瀬 法 円

(東京都養老院理事長院長)
(附属信楽病院院長)

第一、養老院の数と公私立の割合

(一)、先ず養老院の数について申上げると、私の関係した当時の昭和十一年度の全国養老事業協会の調査に依れば、日本全国で、養老院の数は、百十二施設であり、そのうち、公立が僅かに二十一施設、私立が九十一施設であって、公立が私立の四分の一以下であった。

(二)、敗戦后十年、昭和三十年度厚生省調査によると、養老院数は、全国で四百六十施設、公立は三百六十四施設、私立は九十六施設。

戦前十年と戦后十年との公私立を比較すると、公立四分の一以下が、四倍強となって今では逆になってきた。

(三)、手許にある昭和三十七年四月三十日現在厚生省調査によると、公立は、都道府県立四十七施設、市町村立四百二十一施設、法人立は、百七十三施設、全国施設数は、六百四十一施設となっている。

第二、公私立割合の変った理由

「養老事業」が初めは「慈善事業」であって、身よりたよりのない孤独病弱の困窮老人のみを収容していたが、段々と社会責任を感じるようになり、遂に社会連帯責任があると

いう学説が唱えられて「社会事業」となった。戦后日本国憲法が新たに制定せられて、基本的人権を尊重する建前から、一般的なる社会保障制度となり、すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を保障せられることとなり、其社会保障制度の一環としての養老院が、その体質変換を否応なしに要求せられて今日に到った。従って現在の養老院の実情は左の通りである。

其一は、ボーダーライン (Border line) 以下即ち「The poor」「Poor People」の六十才以上の老人を、全国各地にある福祉事務所(所により民生安定所とも呼ばれている)と民生委員の手によって、委託収容する。

其二は、低所得階層の中の老人を、経済的又は家庭の実情によって、前記の手続で委託収容する。

其三は、基本的人権擁護の建前から、家庭裁判所の手を経て、委託収容する場合もある。又は福祉事務所からの特別紹介により、老人の保護が要望せられる場合には、国民の各階層を通じて老人を委託収容することができる。

かくて、社会事業は、国民全体に広がりを持つて、社会福祉事業と呼ばれることになった。

第三、社会福祉事業の意義

私は、社会福祉事業とは、「生きる、ということ、を尊重すると同時に、すべての寿命を畏敬し、すべてのものが、共に共に生きることの尊厳を、礼讃し、供養することである。」と考えている。

世人は、ともすれば、今の社会福祉事業を以て、企業であると断言する。それは、今迄の様に、プーアの救済事業から拡大強化して一般国民のニードを対象とする立場から見て

之を企業と同様に見られることもあろう。企業は、実は、利潤追及を以て唯一無二の目的とする。時には其使命を考えず、手段をえらばず、只儲けさえすればよいと思ってやる者が多いのであるが、此社会福祉事業は、始から終迄利潤を考えることなく、常に、目的と理想とが、第一義として実存する。此点が曖昧であることは許されないから、企業というのは妥当でないと考える。

第四、念仏第一の生活を実行する

(一)、養老院では、老人等と共に生きること、老病人等とも共に真に生きること、其共生活のためには、日々新たに生きる修行をすることが、根本の行事とならなければならない。此処に、養老事業の真の意義があると、私は信じている。その為には、宗教的修行によらなければならない。私共は、仏教的修行法に依っている。「当学沙門法」をモットーとして、先ず幹部職員を教育している。今の処、六名が得度をなし、浄土宗の特別護習を受けて後、毎日修行している。勿論収容老人（院生という）二百六十余名と共に、身心の修行

をつとめている。

その修行とは何であるか。老養院で、念仏第一の生活、即ち、不断念仏、常懺悔の生活をするのである。その為には、昭和二十年十月東京から藤沢市へ疎開した初め頃から、養老院と附属老人科信楽病院しんぎょうの建設地の土地三千坪の中央部に、法円学問寺本堂を建立した。そこで、朝と晩と一時間ずつ毎日二時間の念仏の修行おつとめをして十七年となった。

此頃の当院では、高令の老人等が法円寺流の「健康長寿命仏」の功を積むことに依って、老衰を防止し、健康を保持し、感謝報恩の勤労をつとめる生活に入って、真に安心立命した老人の姿を拝むことが出来るようになった。又、附属信楽病院の老病人も、ベットの上で、仏殿から放送するアンプに唱和して、法然上人の仰せの如く「浄土を願う行人は、病患をえて之を楽しむ」という様な感謝の念仏を申し、無量寿仏の来迎を待つ合掌をしている姿も、数多く見られるようになった。

第五、老人福祉法制定の必要

養老院を経営する以上は、常に飽く迄も、

老人權を尊重することは勿論であるが、それと共に、老人權擁護のために、「敬老愛」を以て、常に働くことが必要である。

私は、自分の二十六年間の養老院経営の歴史を回顧して、いつも、老人權擁護のために働いていたということに気が附く。

そのためには、老人に、「健康で文化的な最低限度の生活」をさせなければならぬから「老人を殺しはせぬ、生かしはせぬ」程度の国の予算の生活保護委託費には、常に増額を、時の政府に迫らぬわけにはゆかぬ。又、国民年金が僅かに老人に月一千円だけは、増額を絶えず主張せざるをえぬわけである。国民に対して、毎年「としよりの日」「としよりの週間」を通じて、敬老愛の道德の振興を願わざるを得ない。又、老人權擁護のためには、「老人福祉法」の制定をしなくてはならない。諸外国には、そのような纏った「老人福祉法」はなくとも、日本では必要であると信ぜられるので、その制定を、目下、議会と政府に請願、陳情をしている次第である。

第六、養老院と老人医学の研究

老人と老人病とは離して考えられないのが実情であるのに、ともすれば、それを引き離して考え勝ちである。例えば、養老施設又は有料老人ホームの経営には、健康な老人のみを收容しようとの考えを抱いて行うことは、大なる過失である。私は、国民年金制度が発達し、社会保障制度が完成に近付いた場合には、必要な役廻りをする残されたる施設は、老人科であつて、家庭的サーヴィスを加えたところの養老病院（又は敬老病院）ともいうべき「病院でもあり養老施設でもある」ものが、最后迄残るのではないかと考えている。老人病の医療は、それ程根本的な重大な問題であり、老人処遇上一貫性ある重要事であると信じている。又、老衰又は老化現象と、老人病とは、医学上區別されていることを、世人も、厚生省当局も、社会事業家も、共に、ハッキリと認識しなければならぬ事実である。我々医学者に、医師諸氏に研究を希望するところのものは、一つは老衰又は老化現象であり、今一つは、老人病とその領域そのものである。

東京養老院が嘗て東京都滝野川区にあった

時代に附属病院は、昭和九年四月に竣工し開業した。ところが昭和二十年四月十三日に大戦災のために全施設が全焼したので、昭和二十年三月神奈川縣藤沢市鶴沼の適地に疎開して、先ず診療所を建てて老人診療に当て、次で昭和二十三年十月二十六日に、附属信楽病院の許可を受けた次第であるが、其間建築と設備のために三年余を過した為、病院としての実績は、昭和二十三年からとなるから、附属信楽病院と「老人病研究室」が出来てからは十四年となる。日本の医学界には、毎年東大田坂内科教室と共に、田坂定孝教授、吉利和教授の御指導の下に、当院の老人病の研究の結果を発表して十年余となる。来年在本院創立十年大祭挙行の年なので、この十年間の老人医学発表のレポートを作成したいと考えている。

昭和四十年頃には、日本の全人口に対して六十才以上の老人は、十パーセントを占めることになることを、統計が教えているので、老人の勤労期間を伸すためには、老人医学の研究を第一に進めなければならぬ。それには、老人病研究医学者、老人学研究者、公衆

衛生学者、労働法学者等が、老人の勤労に対して、適当なる解答を示す日の一日も早く来らんことを希望してやまない次第である。

第七、老人の健康法は何か

老人を健康にする為には「身体の運動を続けること」と医学者は云う。それは尤もである。ところが、老人には、赤子、幼児、小児のように、身体の運動を続ける自然さが無い。むしろ、老人は、物臭くなって、身体を動かさないように意識的にしようとしている。ゴロゴロとしたり、臥床したり、徒らに休息安臥を長くしようとする隠居の姿が常態

である。然らばどうしたらよいか。それには、日本の老人には、少くとも五年以上の年月をかけて、勤労精神を復興し、無理や強制的でなく、自発的に自立的に、老人に適應する勤労をさせることにある。老人は、その勤労により、身体を相当程度動かすであろう。そして同時に精神上には、安心立命の境地に入るように指導するがよい。

われらは、較差のひどい老人に、無理でなく、強制的でなく、それに相應しい仕事を与えて、勤労を喜ぶようにするためには、実に十七年間苦勞してきている。どうか世人も共に、これからの老人のために、働く場所を提

供する義務があると考えて欲しい。

施設外に住む多数の老人等のために、老人向けの勤勞のポストを提供するように、職業安定法その他の労働法を改正する必要も生じつつある。今からでも遅くない。

老人の健康保持のためには、医学者は、「老人は身体を動かさなければいけない」と唱えるが、私共は、「老人の心身に適應する勤勞によって奉仕をさせ併せて、安心立命の方法を授ける」という事が、老人の健康を保持する根本的方法であると断言したい。

—(昭和三十七年九月十三日記之)—

教界トビックス

「鉄は熱い中にうて」の諺ではないが、熱汗リンリたるうちに教団の前途を示唆するプランが練られたり、人材養成の講座など今夏の仏教界はなかなか尊い諸行事がみられた。

もっとも此の動きも一部の有力宗団や宗勢発展に一倍の努力を払う宗団にのみ、みられた点は例年と異りはなかった。しかし、画期的

な計画も秋風ひとしを肌沁みる十一月ともなると、計画だおれで終るか、着実な進み方を示すか、どおやら第一次の成績なり、様相なりがハッキリとしてくるものである。

△同朋会結成

真宗大谷派は昨春の親鸞聖人七百回御遠忌法要を終えたとき、「人類すべての根源の願いにこたえ、自らを失いつつある人間に、自

覚の道を示す」という御教書を教団の内外に発表した。そしてこの線にそって、現状における教団組織の再編成に移った。まず、宮谷御遠忌内局に変わって、訓覇信雄氏が宗務総長として登場したのだが、同氏の宗政最高責任者としての就任は単に真人社グループの表面化ではなく、大谷派最後の切り札としての存在を意味したのである。

いまは訓覇内局も第二次となり更に強力な

ねずみを拾った若者

伊東 拳位



昔、あるところに、一人の若者がおりました。たいへん心のやさしい、信仰心もふかくお寺にお説教があるときくと、きつとききに行き、たのしんでいる、という有様でした。

ある時用事があって、都へ行くことになりました。旅にでしたが、ある町にはいつてくると、チョイとした広場があつて、なにか人だかりがしております。

若「なんであろうか？」

とのぞいてみると、一人のお坊さんがたつていて、人々にむかつて、いきりになにかいっているようです。

とそのうちに、その人々は

「なんだからない……」

「そんなばかなことがあるものか……」

ものとなつたが、去る六月八日から十五日間に及んだ第七十次宗期宗議会に、「真宗同朋会条例案」を上程して多数をもって可決した。そして此の運動の推進のために四億三千二百三十万円の三十七年度予算も可決させて、名実ともに同朋教団確立への第一歩をふみだしたのである。

同朋会条例の中心は従来の「家の宗教」から教団を「個人の自覚による信仰」の結束体に脱皮させることである。

この訓覇構想の具体的な理由は

①家族制度の崩壊によつて「家の宗教」は成立しなくなった。

②現代社会は個人意識が単位となつて構成されている。

③宗教の本質から家の宗教はなく、個人の自覚的信仰の上に教団形成の「場」とおかなければならない。

④従来からの教団維持の基盤である農村社会が、家中心の封建的な社会構成から近代的都市化の様相をみせはじめた。

などが挙げられている。この構想にしたがつて寺檀関係も上下の縦の線から、僧侶、坊

などといいながら、どんどん立去っていきま
す。ですからだんだんすいてきて、若者は、
前の方へでることができました。

さて若者が、前にでてみると、年よりの坊
さんがたっていて、そのすぐ前に、ねずみの
死がい一つありました。坊さんは、そのね
ずみをみながら

坊「このねずみの死んだのを、ひろってい
ったものは、きつとしあわせになる」
といっているのです。

「ばかな、そんなものは、くさったらくさ
くて、こまるだけだ……」

「あいつ、きちがいじゃないか……」
そんなことをいっている者もありました。

若者も

若「この坊さんは、妙なこというナ……あ
んなもの拾っていった、何になるとい
うんだろう……あのねずみが、金で
でも、できるといふのかな……そん
なようでもないようだし……しかし人
をおしえる坊さんが、うそをつくとは思
われぬ……何かわけがあるにちが
いない……」

こう思うと

若「もしもしお坊さん、このねずみ、私が
もっていてもいいのですか……」

坊「ああ、誰がもっていてもよい。しあ
わせになるぞ」

若「何かわけがあるのですか？」

坊「いいや、わけも何もない、わしのこと
ばは、仏さまのことばをとりついでる
のだ。仏さまのことばに、あやまりは
ない。仏さまの教を信じて、これを拾
っていけば、それでよいのだ」

若「では私がいただいていきます」

坊「よしよしもっていきなさい。おまえは
ふだん、仏さまのお話を、きいている
のだね」

若「ハイ」

坊「よしよしそれならよい。もっていきな
さい」

こうして若者は、ねずみの死がいをもって
あるきだしました。

しばらくいったとき、一軒の家の中から、
ねこがとびだして、若者のさげているねずみ

守、寺族、檀、信徒が共に同一線上で聞信す
るといふ横の線で結ばれる信仰共同体へと移
行されることになってくるのである。訓導総
長は「信仰共同体、すなわち教法社会の確立
が、人類の真の共同体の原形であり、現実社
会構成の原理となる」と指摘して、法要儀式
の性格が濃厚だった寺院を、同朋会員の聞信
の拠点という性格にぬり変えることによって
新しい「寺づくり」を目指している。

同朋会の発展が新しい寺づくりの道である
としているが、住職が指導者となって会を育
成するのではなく、あくまでも助言者の立場
をとって、直接に育成していく指導者を門信
徒の中からつくり出すことを第一義としてい
る。これを推進員と名付けて同朋会の中核体
とさせていくようである。此の組織には青年
会、婦人会、子供会など寺院の附属団体は全
て網羅していくのである。そして一家族一名
以上が会員として年額会員費三百円を納入す
ることも定められている。ともかく、旧い寺
組織からの脱皮には地域差の問題や寺檀関係
の混乱など複雑な障害を予測する人々もある。
だが此の会は任意団体の結成ではなく教

のにおいをかいで「ニャアニャア」となきながら、若者のまわりをまわりながら、あとをついてきます。それに気づいた若者は

若「オヤ、おまえこれがほしいのかね……

よしよしあげるよ。それおあがり……」

といって、ポイツ、となげてやりました。

ねこはそれをヒョイッとかくわえると、いそいで家の中へとんでいきました。

この様子を見ていた、その家の人は

「どうも家のねこがありがとうございました。何かお礼をしなければならなのですが、私の家は貧しくて、何もさしあげるものがございません。そのかわり、お手つだいすることがありましたらおっしゃってください。いつでもお手つだいします」

若者は、又あるきだしましたが、まもなく一軒の宿屋のまえにきますと、うまがたくさんにいて、一人の男が、宿屋の主人らしいひとに、なにかしきりとたのんでいるようです。

もともと心のやさしい若者は、そのようすをみると、

「なにかしら」

とおもって、そばへよつてきいてみました。

男「もうわしも、馬もつかれているのだ。

せひとめておくれ」

主「わたしの所は、泊めるのがしようばいですが、おとめしたいのですが、そのたくさんの馬にはこまりますヨ」

男「いや馬は庭につないで、草さえやってくればいいので……馬の分も宿ちゃんは払いますよ」

主「その草にこまります。今日はお客様がこんでいて、草をとりに行く者がおりませんので、おことわりいたします」

男「そんなこといわずに……」

主「どうもこまります」

これをきいていた若者は、

若「もしもし宿屋さん、もしその馬にたべさせる草さえあれば、この方をとめてあげられるのですか……」

主「エエ、そうです。私の方はしょうばいですから……」

若「では、その草は私がもつてきてあげましょう」

男「ありがとございます。これで私もこの

団の根本使命の達成であると宗門は大変な決意を示している。

既に活動五ヶ年計画も作成されて推進の中心を①教区指定奉仕研修団②特別伝道隊の派遣③推進員認定研修会の三点にしばったが、此れは戦後の同朋生活運動、同朋会館の奉仕研修会、同朋壮年研修運動ほど過去の実態調査の資料をもとに画されたのである。一方、宗務当局も企画室の充実、宗務調査会の設置、現代の聖典編纂、教化カリキュラムの編集に着手し第一次行動を九月から開始した。最初の実動に入った第一次指定教区は東京を都市開教モデル地区とし、九教区十八組を指定し、十七人の伝道講師を宗務所から派遣している。

まったく既成教団としては運命を賭するほどの刷新的な計画であり、その総合達成のため、同朋新聞による僧俗の認識徹底など大谷派は着実に回生への路線を歩みはじめている。

△「新日本僧伽」興律精神の復興へ

「戒律なくして仏教なし」と宣言して大阪

家にとめてもらえます」

若「ではすぐ草をもつてきましよう」

それから若者は、いそいでさっきのおかあさんの所へきて

若「すみませんが、公園の草かりを手つだ

ってくださいませんか」

母「ハイ、よろしゅうございます」



さりいただきました……そこでお礼にあなたへもお金を……」

といって、お金をくださいました。

そのお金をいただいて、しばらくくると、大きな川があり、その堤を、大ぜいの人夫が土をはこんだり、石をはこんだりしてなおしているのにであいました。

若「やれやれこれはごくろうなことだ。このあついのに、さぞかしつかれることだろう」

と思いながら、フトそばに茶店があるのに気がつきました。

若者はすぐその店にはいっていくと、けさやどやの主人からもらったお金をだして、

若「ここに、これだけお金があるから、こ

れだけ、おだんごやおせんべを、あの堤なおしをしている人たちに、たべさせてあげてください。それからお茶もあげてくださいヨ」

とたのみましたので、茶店のあるじは、すぐにいわれた品々を、人夫の親方の所へ、とどけました。

しばらくすると、その親方がまいりました

市に日本新僧伽が発足した。現在は滋賀県蒲生郡日野町字平古にある澄禪寺を道場して修行に励んでいるが、この寺は浄土宗の大徳と云れた澄禪上人の寺で、十八年間、木食しながら三本一鉢の生活に終始した故上人の靈跡であり、新僧伽結成にふさわしい精舎である。

新僧伽は戒定慧の三学を基調とした出家を中心に道俗一体の四方僧伽であると宣言しているが、そこには現代仏教を救う方途は原始仏教の理念に帰って、ただ戒律思想を復興させる以外に道はないと教えられている。

僧伽の長老である井上義宏師は現代の仏教界の教化不振は僧侶が自己の破戒に対するコンプレックスが一因になっていると痛言した。又、仏教をいまの乱れた社会に生かし乱世の建直しをはかるには本当の出家生活をもつ僧を中心にした教団でなければ不可能だとも云っている。

例えば地域社会、職場、政治の場など、あらゆる処を浄化し、善をすすめ悪を退けるには本当の世間智を持った宗教家の力による外はない。この正しい世間智を持つには世間類

親「ただいまは、ごしんせつにありがとうございます
ございました。みんな大喜びで『この
お礼をしなければいけない』といって
おりますが、私たちは、何もさしあげ
るものがございません。そのかわり、
力のある、若い者が、大ぜいおります
から、御用がありましたら、いつでも
そういつてきてください。すぐいつて
お手伝をいたします」
といいました。

さてこんなことがあって、いく日かすぎ、
若者は都へつきました。
用事もすませたので、これから都をすこし
見物してから、家に帰ろう思っておりまし
た時、大嵐になりました。

二日程、つよい風・大雨がつづき、つぶれ
る家、屋根をとばされた家、大水につかつた
家など、大さわぎでしたが、この嵐のため、
王様のお城のへい、や、門がたおれてしまいま
した。

このころは、大きな国が、小さな国をねら
ったり、強い国が弱い国をつぶしたりしてい

たころでしたから、城のへいが倒れたり、門
がこわれていることは、大へんあぶないこと
でした。お城では、すぐに人をあつめ、治さ
せようとしたが、どこもこの嵐で、いた
んでいるため、人がなかなか集りませんでし
た。

そこで家来たちが、方々の家を、一軒一軒
まわって、城を治す手伝を、頼んであるくし
まつで、若者の泊っている宿屋へも、そのつ
かいの家来がきました。

話をきいた若者は、

若「それでは、私が人を呼んできます」

と、すぐ先日のお方の所へ行き、

若「こう云うわけですから、どうぞきてあ

げてください」

と、たのみました。

親方は、すぐに人たちを集めて、応援にき
てくれましたが、こうした仕事には、なれ
ている人夫たちですから、たちまちお城は、
ぶじに治りました。

このことをおききになった王様は

「家来が人をあつめても、なかなかあつま
らなかったのに、その若者は、どうして

の一切を捨て去った出世者（出家）でなけれ
ばならないとも云っている。

マス・プロ時代の中で「稀少価値」でよい
それこそが無用の大用となるのだと胸を張る
日本新僧伽も秋から冬へと仏教界に峻厳な新
風を送りこむことだろう。

九、十九（憲）

すぐに人を集めることができたのだろう
その若者にあつてききたいものだ」

といい、さっそく若者は、王様のお城へよば
れましたので、坊さんからいわれた、ねずみ
を拾った話から、だんだんお話をしました。
それをじっとおききになった王様は

王「おまえは、ものを世の人々のために、

しんせつに、いかしてつかっている。

それこそ、仏さまの教えなのだ。

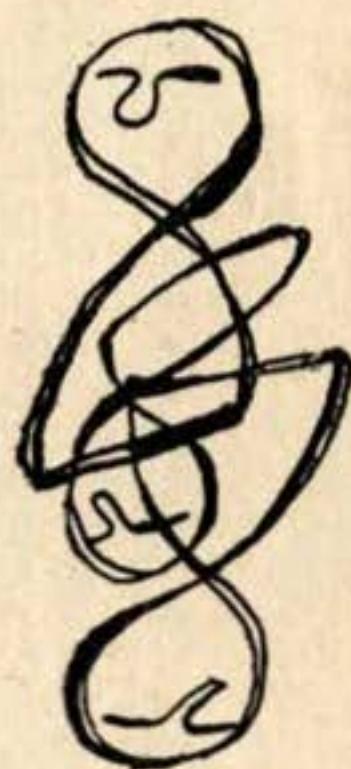
おまえはしらすしらすのうちにやって
いたのだ。

おまえのような心がけのよいものが、
私のそばにいて相談相手になってくれ
たら、国の者もしあわせと思う。大臣

（十七頁につづく）

隨 筆

慰 問



村田嘉久子

(元 帝 劇 女 優)

つい先月の廿六日に藤沢市の東京養老院分院へ品川在住の華道の先生方又茶道の先生方剣舞の代庵夏目星晃先生方と御一諸に慰問に行つてまいりました。

私はもう十年あまり毎年春か、又は秋にはかならずと言ってよい位い御慰問に行つて居りました。勿論私が直接踊つたり、唄つたりする訳ではなく、奇特定の踊りのお師匠さんやその御弟子さん達、若い方子供さんなども交えて半衣裳で舞踊をお観せしたり、時には常磐津の上手な方、又は義太夫のうまい方など

に行つていただいて次から次へと休憩なしで披露したりしました。

もともと手弁当で、一切合切こちら持ちで行くのですから、それに忙しい中を都合をつけて行つて下さるのですから、それは中々皆さん熱心にやって下さったものです。それと申しますのも、この養老院の院長の川瀬先生は以前芝増上寺で御修業をされたえらいお方、私もそんな関係もあつてこの養老院は何となしに親しみが深いのです。

丁度四年前品川在住の華道、茶道の先生方

からは是非養老院を慰問したいから紹介して下さいと、わざわざ代表の方が訪ねて見えまして、それから今年で丁度四回目でした。最初川瀬院長さんは私に、「実はお花とか、お茶とかの御慰問は初めてなので、どういう風に受入れてよいものか……」と御相談がありました。が、さて紹介者の私もその点をよく知らないで困つて居ると、院長さんは重ねて「お茶をいただくなら不断着じゃ失礼だらう、ちゃんとしたなりをしなければ……」、と言う訳で院内のお老人達がこうりの中をかき廻すやら着替えをするやら大変な騒ぎとの事。そこで私は兎も角もそんなきゅうくつな思いを皆さんにさせてはこの暑い中慰問にも何にもならないから、いつものままでよろしくはないでしょうか、と申し上げて院長さんもそれでは皆にそう伝えさせましょう……と言う事であまりきゅうくつにならないよう取計いしましたが、さて場内へ出て来られた皆さんは実にキチンとした身なりで御行儀のよいものでした。

ところで慰問に行つて下さる皆さんの方は、はじめての夏が十六人、その次の年が二

十五人又その次の年が、という風に段々増え
て行つてこの方々が一人二個の華器を寄贈し
て下さったので十六人で最初は三十二個の美
しい花入れにそれ／＼の形にお花を生けて、
その生ける時皆さん舞台へならんで御持参の
大きな花束を一ツ／＼の御華器へ、十六人の
先生方が生けて下さるのを院内のお老人達は
びっくりしたような、又珍らしいような顔を
して見取れて居る様子は誠に和やかな光景で
した。

色とりどりの美しい花は、又色とりどりの
美しい華器に生けられて、美しい華道の先生
方の心の籠ったお花はこうして三十二組、各
部屋へ飾られました。

院内のお老人の中には昔植木屋さんだった
人もあり、庭造りの上手な人なども居られる
そうで、院内の庭にも色々の花が咲き乱れて
居りましたが、この華道の先生方の御持参の
お花は流石に美事な美しさでした。

お老人連中は眼を細めてとても嬉しそうな
顔をしてお互いにうなづき合つて居られまし
たが、それから今度は茶道の先生方の番にな
つて、舞台は一変して三ヶ所に御点前の座を

つくり、そこで本格的なお点前を皆さんにお
見せして、別に楽屋に当る部屋の方で大勢の
方々が忙しくお薄を立てこれまた、寄贈の薄
皮まんじゅうと共にお老人連中の居る場内に
一人一人持つて廻りました。

最初茶道の先生が「お茶をいただく心得」
というような事を説明なさつたり、いろいろ
お話をして下さいましたが、さて頂戴して居
るお老人連中の様子を見るとびっくりする程
作法に適つて居て、ことにこの中の代表者と
も言われるお老人などは実に見事な動作でし
た。

後で院長先生から聞けば、この人は昔宗匠
であつたとか……兎も角このお茶とお菓子、
又はお華の接待は異常な効果を上げました。
院内の皆さんの喜ぶ顔、馴れた手付きで茶碗
を持つ人、珍らしそうに少時茶碗を手に、お
菓子を前にニコニコ眺めて居る人、あつちこ
つちにいろいろの和やかな気分がただよつて
慰問をしに行かれた方々もほほえましい気分
に浸りました。

この場内は正面に阿弥陀様を据え丁度お寺
の本堂のようになって居てその前が広く、こ

れが舞踊の時などには丁度舞台のようになつ
て、つい二三年前簡単な幕を引きましたの
で、慰問団の来る時にはみ仏の飾つてある所
へ四枚の白い襖を締めるとそのまま舞台に急
造出来るので誠に便利なのです。

院長先生も無量寿山法円学問寺主川瀬法
円、というお名前でここのお老人達は朝夕各
一時間のお念仏のおつとめをされます。

お念仏に明けお念仏に暮れ、しているお老
人達は心なしか誠に顔色もよく、和やかな気
分で暗い蔭など少しもありませんので、その
気分が又こちらへ伝わつて皆和気あいあいの
内にこの慰問はいつも終るのですが、私は一
人で芝居をやる訳にも行かず踊りや、唄と言
つてもそれぞれそれを承まわる方々が行つて
下さるのですから、もうその芸能方面の方は
全部人様にお任せして、いつも法話……と申
しても感話、とでも申しますか、そう言つた
お話を三四十分する事にして居りますが、長
年伺つて居りますので皆さん私の行くのを待
つて居て下さつて、昨年など、丁度テレビの
本番につかまりどうにも伺えなかつた時な
ど、後で華道茶道の先生から「村田さんはど

うされた」とお老人達から言われたから是非
今度は一諸に……と言って下さったりして、
私も誠に張合いがある訳です。それにこの分
院には誠に立派な附属病院があつて、東大の
先生方がいろいろの老人病を研究して居ら
れ、その病室にはいつも百人以上のお老人達
が入って居るので、この人々には眼で見る慰
問はすべて駄目なので、マイクを通じてのお
話を大変喜ばれる訳です。

今年は、私はこの「浄土」へも過日書いた
ように百万遍のお話をおもしろく致しました
が、文字の上では表せない所もゼスチャー入
りでのお話では非常に受けて、ことにお念仏
をはじめ静かに、そしてだんだん早間に高音
になって行つて終りにおじゆずの親玉をつか
もうと皆が先を争そう所などおもしろおかし
くお話しましたら、大変に喜ばれました。

私は折悪しくこの日矢張りテレビのりハ
サルで、東京へ早く引上げなくてはなりませ
んでしたので、この後剣舞の夏目先生が二三
舞つて下さる筈でしたから、今までの静かさ
とは変つて皆さんさぞ喜ばれた事と思いま
す。

こうして華道茶道の慰問はいつも楽しく、
和やかに行われるのですが、院長先生も先日
しみじみとお喜びになつて「全国にいくつか
のこうした養老院があるが、そしてありとあ
らゆる慰問を受けるが、このお華とかお茶と
かの慰問は誠に珍らしい。大変皆喜んで居る。
有難度い事です」と御挨拶なさいましたが、
私も最初お華やお茶の慰問とはどんな工合に
なさるのか……と院長先生からそつと御相談
うけた時は仕方も解らず困りましたが、結果
は見事な成功を納めた、と信じて居ります。

そしてもっと嬉しい事は慰問に行つて下す
った華道の坂本先生、小島先生と仰しゃる代
表の方から『村田さん、私達は認識不足で、実
は慰問に行く前までは、養老院のお老人は気
の毒な人、暗い、哀れな人々の集り……、と言
う風な考え方で居たのです。所が行つて見て
驚いたのは院内の皆さんは一人として暗い蔭
なんか無い、始終ニコ／＼して、而も明るい
あの顔色はどうでしょう。私達はあのお老人
連中の顔を見ている内に此方があべこべに慰
問されてるような気持ちになりましたよ。慰問
する、なんて僭越で此方が慰問されに行つた

ようなものでした。よい事をさせていただき
ました。ありがたい事でした。』と仰しやら
れたのには私も誠に嬉しい、有難度い気持ち
になりました。

朝夕一時間のお念仏のおつとめ、何んでも
ない事のようにこれがどんなにお老人達の和
やかさ、明るさをささえているか解りませ
ん。

南無阿弥陀仏——今更のように、名号はこ
れ万徳の帰する所なりという事を私はしみじ
み味いました。

（童話、ここにつづく）

として、私につかえてくれ」

とおっしゃいました。

こうしてこの若者は、あの坊さんのことば
どうり、幸をつかんで、大臣となつて幸福な
月日をおくりました。

だが、ねずみを拾つた若者の、そのねずみ
のつかいかた、それからあのちの、もらったも
ののつかい方を、よく考えてみましょうね。

おしまい

（本生譚の中にあるものを、少し治して
実演しやすくしてあります。）

結 婚 式

谷部 禪雄

(東京・大泉寺 住職)

本日の佳辰を御運びになり、高尾和夫さんと立花順子さん双方深い御理解の結果結ばれて結婚の式が当山の御本尊前に於て高野僧正を戒師として仰がれ、随善の御寺院並に御両家の御親戚御友達の御列席を戴き、いとも厳

かに執り行われました事は、皆様と共に心から御慶び申上げると共に永遠に御多幸と其の御繁栄を御祈り申し上げます。新郎新婦の御二人は今日より本当の社会人としての大道を御進みになるので御座いますから、如何なる苦難の道も互に相い助け合い、いたわりした

つ集って一つになったので、夫婦は異体同心とは妙にして不思議なもの、昔も今もいや永劫に真理にして不易なものです。これが解れば益々互に和し順う心が自然に生れるのであります。

更に此れば新郎新婦に限らず御一同様も心に浮べて戴き度いと思ひます事は、私共現に今生々として此の世に生活をしておりますが、これは又いとも尊く有り難い事で御座ります。人として生れると云うは如何に得難いか、法然上人も受け難き人身を受けてと申されましたが一つ考えて見ませう。男一人前になると子種の数は四千三百有余億、女の方は七千三百有余万の能力が有ると申します。これを合せて夫婦となり父母として私共は生れて余りました。昔から花は千咲けど家は一つ

申しますが、四千三百有余億の中から私共が生れたとすれば例え兄弟三人五人あつても何千億の中から一人と云う事になります。況んや今日此の頃は調節される世の中一段と生れる率が少いのであります。入学難だ就職難だと大騒ぎをしておりますが、物の数では御座いません。仮に日本の人口九千五百万としてこれを男女に等分すれば、女五千二百有余万の中から新婦が選ばれ、男五千二百有余万の中から新郎が選ばれた事になりますから、如何に得難い組み合わせかに互に喜ばなければなりません。

先き程御戒師の勤誠にもありました通り、正に相い敬愛し憎み嫉む事なく、有無相通じて貪惜する事なく、言色常に和し、相い違戻する事なかる可しと示されました様に、又新郎新婦の誓詞の中にも今日の心を以て終生の心となし相愛し相敬し相信じてと誓はれましたが、全く其の通りで御座いまして、仲々出来ない事でせうが時折り憶い出して御忘れなく、永き一生の間、風の日雨の日幾多の山坂道もある事でせう。又順風に帆を掲げる楽しい日もあるでせうが、子孫のため社会の一員

としても大地を踏みしめて、意義ある人生を一日一日と打ち立てて下さる様これ亦皆様と共に御祈り申し上げます。

さて次に一言加えさせて戴きます。従来一般には神社や教会での結婚式は珍らしくはないのですが、仏前の結婚式は未だ珍しい様です。私は北陸の生れですが、花嫁さんでも花婿さんでも先ず婚家の仏壇に礼拝して式に移る事になっておりますから、昔から仏前結婚式です。又新宅別家が出来た場合必ず仏壇を備え付けます。現在も未来も過去も仏様と共に云う堅い信念が自然に植え付けられております。其の点関東方面は恥しい事だと思ひます。これも教化の足らざる事と反省し慚愧の至りで御座います。ですから世間一般の人々は仏前結婚、ヘイと驚く人々がありますが、仏様特に当山の御本尊阿弥陀如来程芽出度く有り難い仏様も神も御座いません。一切の仏菩薩天地の神々も、阿弥陀如来の尊さあり難き偉大さを讃じ仰いでいられます。南無阿弥陀仏、南無とは何卒と身も心も御託せする意、阿弥陀とは無量の光無量の寿偉大な智慧の光りを十方世界隅なくさし延べて照し

救い広大な慈悲の御交りを十方世界に輝し総ての人々を区別なく常に守護し育て導いてやると御誓いの姿ですから、これ程尊い有り難く芽出度い方は御座りません。

明治の初め頃京都の大本山清浄瑠璃院御法主で学徳高き久保了寛上人に、檀信徒総代の番頭主人の命を受け、上人に申上げての御願いの儀今度若主人の婚礼に当り、その日その式が挙行される運びになりまもたが、洵に恐れ多い御願いでは御座いますが当日本席に御掛け致す芽出度い一筆をと存じますが如何なもので御座りませうか。ヨシ分つたと上人墨痕淋漓立派な御筆 南無阿弥陀仏、これはそも如何に番頭手身低頭、それはそれは洵に結構に存じますが、結婚式の本席には一寸と如何かとヘイ、然らば聞しが当日の飾り付は、ヘイ松竹梅鶴亀等世に芽出度いものばかり。デワ聞くが松竹梅の寿命は。鶴亀の寿命は、ヨシ分つた。万物の霊長たる人間が植物や動物にアヤカルとは一体何事だ。松も竹も梅も時が来れば枯れる鶴や亀も千年万年以上は生き

られぬ。南無阿弥陀仏は無量の光無量の寿命だ。御水に過ぎ芽出度事は他に無い。然らば分る様に讃をして上げよう。鶴亀も及ばざりけり。南無阿弥陀仏ほとけの御名に限りなければ。有り難う存じますと番頭大喜び帰宅して、早速事の次第を主人に告ぐ主人も今更の如く感激当日本席に御掛けして一同と共に芽出度したと御家益々繁昌洵に有り難く尊い御話。後世の人々も大いに学び度い事と存じます。

法然上人七十九才の御時建暦元年十二月八日、法性院の永辨法印の問いに答えて、念仏の行者の身は今生にては榮華の身となり、子孫繁昌にして後世は疑いなきものなりと。新郎新婦の御二人様はこれからが人生の長旅何よりも尊く有り難い。南無阿弥陀仏一生の燈として、竊に胸に懐き、仲良く正しく明るく一步一步と大切に御精進下さる事を、心から御祈り申上げて、本日の御慶びの言葉とさせ戴きます。

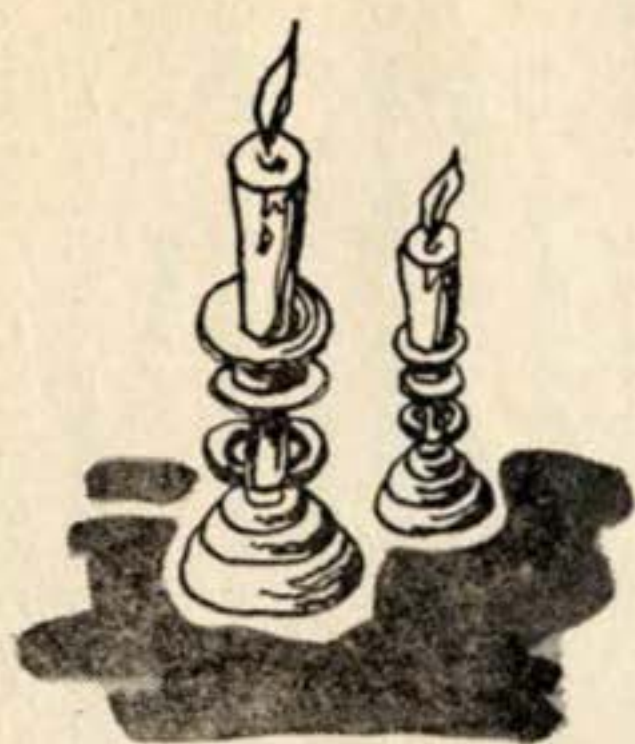
では御一同様共に、合掌同称十念

アメリカ旅行

— 5 —

佐藤 治子

(鎌倉・大仏殿 内室)



尼僧院訪問

マリオンの従妹のスーシーが尼僧として修業中のアシノと云う所にあるマリノ尼僧院を訪問する事になった。ウイルマの御両親の所で御昼食を頂いてから一路北へ向け車は走った。ブロンクスリバーパークウェイの美しい木立の中を通るドライブウェイはすがすがしい気分である。小川のほとりに沿って車は走って行く。小川に近く芝生の庭の様な広場がある。犬をつれて散歩の婦人や、小供連れのお母さんが楽しそうに子供達の遊んでいるのを木かげで椅子にこしかけ編物をし乍ら見守っている。郊外の町を通り抜け山ふところの道にさしかかる。大きな樹木があつて道はよし景色はよしで大都市の周辺とは考えられない。

四十分位走ったと思う頃、道は登り坂になって来た。小高い丘の左側に中国の様な建物が見えて来た。これは男の人ばかりのつまり修道僧のいる建物と云う。このカトリックの一派は一九二〇年に支那で布教に従事したいと願う僧侶達により結成された教団で、尼僧も加わるやうになってから、少し離れた所に

尼僧の為の別院を設立した。それがスーシー達のいる尼僧院であり私達は今そこをたずねるのである。この教団は支那で布教が困難になつてから、ホンコン、フィリッピン或は南アメリカそしてアフリカ等で布教に力を入れてゐる。布教の地に支那を選んだことをきけばハドソン河の上流を望める小高い丘に立つ中国風の建物が不思議だな、何故だろうと思つたなぞがなるほどとうなずけたわけである。

少し離れて左の方へ車は入り駐車した。何台か車が止つていた。この日は月に一回許される面会日なのである。アメリカの立木は一本ずつ見上げると実に大きい、伸び伸びと枝を左右に拡げた大きな樹の下に、黒い尼僧服をきたカトリックの尼さん達があちらに一かたまり、こちらに一かたまりと家族や友人達にかこまれ椅子にこしをかけ話をしている。丸顔のかわいい顔をした尼さんが近づいて来た。男の人と話をしていたが私達をみて立って来たのである。スーシーその人である。男の人はマリオンのお父さんであつた。前からいらしてたと見え、スーシーにキスして、私達に挨拶して帰られた。マリオンは「スーシ

「よ」「治子ですよ」と会わせたいと思っていた私達二人を紹介した。医学を勉強していたこの人が何故心気一転して尼僧になったのかしら、ふくよかな顔、つやつやとしたほほの色、ふかい意味あり気な笑みをたたえている。スージーとマリオンは少し話をしてから僧院を案内して下さる事になった。

道をへだてた丘に立派な礼拝堂が建っている。長い裾をおしもち上げる様にしてスージーは先へ立って行く。手入れをしてある広い庭の樹の下かけにはどこにも面会者が尼さんを中心にして楽しそうに話している。着物姿の私をみんな遠くからみている。戸を開けて入ろうとすると中から二人中年の尼さんが誰か送って出て来た。ハッとしたらしく私を二度見上げた。その尼さんは「まあ日本の方おなつかしい」と声をかけた。思いがけない所で日本語をきいたのである。私達はおたがいに丁寧に日本式のおじぎをした。その尼さんは京都の方か「もうすぐ日本へ帰ります」と話されたが、私にさわらんばかりのなつかしさ一杯の様子であった。スージーとマリオンは日本人どうしのおじぎと、目をかがやか

してなつかしがって話していられる日本人の尼僧さんと私とをニコニコし乍ら眺めていた。

私も思いがけない所で日本人の尼さんに出会い、向うでも恐らく日本の着物をきた人に出うなんて予想もされなかった事だろう。京都の人ときくからには、この宗派は日本にも入って布教されているにちがいない。そう云えば、この建物へ入る前庭に石燈ろが、日本のような松の木の下に配置されていて私をおどろかせたのであったが、日本へ来たこの教団の人が持ちかえったのかも知れない。名残惜しげなその尼さんと別れて、スージーに案内され、中へ入ると通路の両側にある小さい部屋部屋の中の一つに年とったマザーが二人いて、私が軽く頭を下げるとにこやかにほほえみかけていた。

つき当りの広い部屋の横に入ると礼拝堂がある。あちらに一人こちらに一人と広い御み堂にペールをかぶった尼さん達の祈りをささげている後姿がみられる。十字を切つてひざまずくスージーのそばに私は教虔の念をもつて立っていた。寺を訪問するアメリカの人達

も、御仏間に入ると教虔の念をもつ態度で静かにしている。旧教信者にとり一番大切な祈りの場所である。私はじっと立っていた。目を移すとマリオンが私達二人を見守っている。やがて立ち上ったスージーと私達はそつと御み堂を出たのである。数々の大きな樹木が庭一杯に枝をひろげている。礼拝堂の周囲の庭にも尼さん達が面会人と楽しそうにすにかけくつろいでいる。私達は一廻りして下の建物の前へと戻って行った。

最初スージーが椅子にかけていた後の建物は寝室や読書室があるらしい。そろそろ面会の時間も切れるらしく、家族や友人とキスして別れをつけている尼さん達、スージーも、マリオンのほほにキスをして暫くの別れを、惜しんでいた。カソリックの尼さんと仏教を信じる私とは固いあく手をしてサヨナラをした。無口な人だけれど、何を思つてあの微笑をうかべているのだろうか。理智的で学究的であつたと云うスージーが何故、すべての社会のつながりをたち、黒の長い服とペールに身をつつんでしまったのだろうか。他の尼さん方の顔よりも一段と幸福の微笑をたたえて

いたスーシーが忘れられない。信仰に入った動機、そしてなぜカトリックを選んだのか、その理由を私は知りたい。肉親の誰もがスーシーの心境はわかっていないと云う事である。修道院の前庭でいつまでも手をふっているスーシーをふりかえりふりかえり、私達の車は坂を下って行った。理智的に物事を考え、処理して行くマリオンは神一すじに奉仕し修業しているスーシーの心境は分らないとも云っていた。スーシーは突然に肉親との縁を断ち、十九や二十の年頃で医学への研究心もすて、カトリックの尼さんになってしまったのである。私には満足しきっているかの様なモナリザを思わせるあの意味深いほほえみの顔が心に深くやきつけられてしまった。サンフランシスコで一週間泊めて頂いた私の古い友人も熱心な旧教信者である。あたたかいまなざし、寛大な心の持主のその人の生活も心うたれるものがある。

人の信仰をとやかく云うべきでない。けれどスーシーのあの表情から、私が知っているカトリック信者の一部の人達の私達に感じさせる特権階級意識は全然受けこれない。サン

フランシスコのビードイルさんも又然り。一人は普通の生活をしている。一人は一生を尼として、若くして修道院に入ってしまったのである。神一すじに奉仕し、満足しているスーシーは幸福であると私はマリオンに話すように、或は自分にきかせる様につぶやいたのである。

「幸福とは何ぞや」と時々二人で議論をするのであったが、スーシーのあの顔付きは私の心に強い印象を残してしまった。マリオンは一人は尼僧に、一人は寺庭にある二人の御堂の中に於ての態度をみていたが、私にはマリオンが何を考えていただろうかとのまなざしを考えていた。

車はニューヨーク市の水源である山に囲まれた大きな貯水池を通り、再び木立の中のハイウェイを夕方のブロンクスビルへと走って行ったのである。

小学校見学と国旗

十月十日（火曜日）の午後、マリオンの友人で教育関係の仕事をしているヘイゼルの案内で、マウントバーノンの近くの小学校を見

学した。

授業中と見え静まりかええっている。靴音も立てない様にしてヘイゼルは事務所へ行き訪問に来たむねを告げた。父兄らしい人を送りに出た校長は私達をみて、「ようこそ」と手をさし出し、「何卒々々」と自分で部屋に案内して下さった。前から連絡してあったにちがいない。

この章をかくに当って、私の話して来た事をどう云う風にかこうかと頭の中でまとめるのに苦心していた私に、ハタとひざを打って、これなのだと思わせてくれたものが、七月八日の朝日新聞夕刊の「世界の窓」の中の「ワシントン」と云う題でかかれていた記事である。「学校でお祈りはだめ最高裁が違憲の判決。信仰心厚い国民にシヨック」という見出しをよんだのである。偶然と云おうか、校長先生との話にこの中にかいてある様なことを話したのであった。

朝日新聞の記事の一部をここへのせさせてもらうと、

『最近これほどアメリカ人に衝撃を与へた判決はなかった。六月二十五日最高裁が「公立

学校におけるお祈りは憲法違反である」と裁断を下して以来宗教界はもちろん政界、学界、言論界では連日大激論が戦わされている。

原告はニューヨークに住むユダヤ人やユニタリアン（神教の一派）ら五人の父兄。毎朝学校の始る前「全能の神にわれらとわれわれの両親、教師、国家とに恵みをたれ給え」とお祈りするのは国教の樹立を禁止して

いる憲法に違反するとの理由で、はじめニューヨーク州の最高裁に提出して負け、その後全米市民自由連盟の応援を得て、連邦最高裁に持込んだ。連邦最高裁は「国家と教会の分離こそ米国の政治制度の根本」としてワレン長官を含む六対一の圧倒的多数で原告の主張を支持した。少数派スチュアート判事の意見は「宗教が今日

いかに国家的行事にはいつているかは議会の開会をお祈りで始めるのでも明らかであり、国民感情を考慮して憲法解釈をもっとゆるやかにすべきだ」というものである。米国はその建国の歴史からみても、国家権力が宗教に介入することを極端にきらって来たが、同時

に国民の大多数は宗教心があつく、半数以上の州では学校でバイブルを朗読するなど、教育とキリスト教は切離せない関係にある。したがって今度の判決は国民各層に大反対を巻き起した。議会では「米国史上最大の悲劇」「良心をマヒさせる言語道断の判決」「最高裁は学校に黒人を入れ学校から神をしめ出した」



庭園の僧尼ノマリ
筆者とスージー

など激越な調子で攻撃を始め、早くも学校でのお祈りを認めるよう憲法修正案がぞくぞく提出されている』、と云うのである。

今にしてふりかえってみると偶然校長先生と話をして来た事を考え、アメリカの一般の国民がキリスト教徒であり、国旗と国のシンボルにしている事実を至る所でみて来た私に

は、この記事をよんで憲法違反であると云う人の立場も、又憲法解釈をゆるやかにすべきだと云う事を云う人の考えもよく理解出来るのである。

十年前葉山にあったキャンプマギルの小学校のPTAの会合にお客として招かれた私は、ホールの一隅に室内用の小さい国旗をたて、全員起立して手を胸へおき、お祈りをしたのを思い出し「小学校で今でもそうするのですか」ときいてみた。私が個人としての考えて校長先生に話した事は、私共が小学生の時各学校に御真影をかざり遙拝し、君が代をうたった事。私のいる鎌倉では神社の祭礼の日、全校生徒揃って八幡様へ参拝し、各區別のおまつりにはその土地に住む子達だけ氏神社へ参拝し学校は休ませてくれたものである。此の習慣の是非々論は別として、戦争直後先ず手をつけられたことは国民にしみこませた神道イズムを取り去り、教育上にも改革を命ぜられたことである。アメリカ軍に占領され、敗戦の大きな痛手に加えて、急激な教育の改革、自由を与えられたとは云え、そしてたとえアメリカの目的は神道イズムを除

去することではあったろうが、その行きすぎで国民は心の交えを失い、物質的には除々に復興して来たものの、精神的には日本独特の古い習慣をそして国旗を立てること、国歌を

うたう事等から心がはなれてしまった。それを敗けた事であるから致し方がなかったけれど、宗教の自由を云い乍ら、アメリカではキリスト教による道德教育を行っているらしいのをみて（全体をみて廻ったのでないからそうであると云い切れぬ）私達の一つの習慣をとりぞかせたGHQであり乍ら、本国では公立学校でも依然として行っているこの行事を「おかしな事ですね」と話したのである。校長先生は「生徒の中にはユダヤ教を信じる家庭の子供あり、或は旧教信者もいる事であるから、特定の一宗教にかたよりにしていいが、只神の御心にそむかないように全体的に神と云うのです」と云われた。

ハーヴァード大学構内に或はアナポリスの海軍兵学校の構内に礼拝堂があり信者の学生達は礼拝に行く。白手袋をはめ未来の海軍将校になる青年士官が列を組みチャペルへ入って行く姿を私は偶然にみる事が出来たが、

宗教学校をのぞき日本ではどの大学に礼拝堂があるかしらなどと、一つ一つ日本を思い起さずにいらなかった。

礼拝堂があるなしよりも、小学校に於ての祈りの短い一刻が大人の社会に入ってよりの常識的に物を考える一助になるのではないかと、建国以来の国の年令に大きな差もある事だし宗教をとり入れてほしいと云う事と別に、私はアメリカが祈りをする国民、国旗を大切にする国民であると云う事を痛切に感じたのである。アメリカでは裁判の始まる前に、バイブルに手をのせ誓約するし、日本では戦前よく「天地神明」に誓ってと云ったものであることを思い出す。

或る夜、マリオンの部屋でケネディ大統領の国連に於ける演説をテレビで一時間に渡ってみせられ、聞かされた私は、あまりむずかしくて英語は分らなかった。けれど何と云う美しいアクセントかしら（ボストンなまりとか云う）、詩をきいている様だとうつとりとして過している時「神の御名に於て云々」と云う言葉だけ私の心に飛び込んで来たのである。国会の演説でなく国連での演説であ

る。そしてケネディ大統領のスピーチは終わったのであった。もし日本の首相が、神様とか御仏のとか云ったらどんなことになるかしら。それぞれの家庭に信仰はあっても公の席でのこう云う言葉は禁止されている。そして古い歴史をもつ日本は神徒にしる仏教徒にしる、自然習慣として或は行事を行うことによつて、何も公けの席で神の御名に於て云々と云う必要はないかも知れぬ。

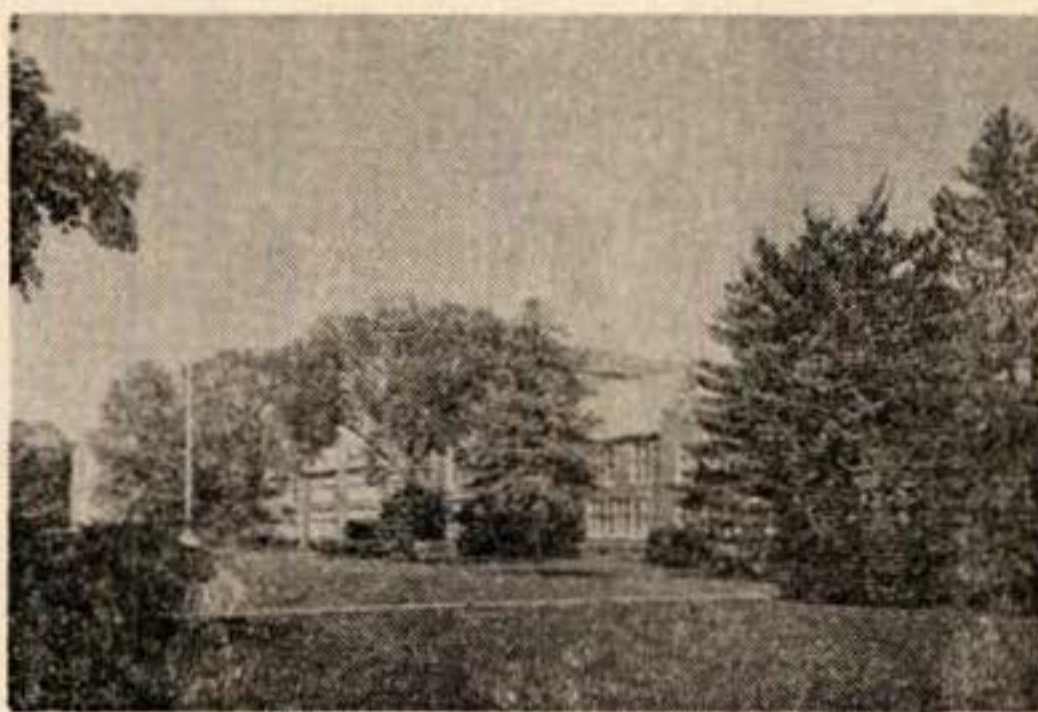
何はさておき、私には仏教を信ずるが故に、そして歴史の古い国の誇りにするが故に、この習慣を、そして郵便局に至るまで国旗をたて「あそこに郵便局があるわ」と分る位に国旗がシンボルになっているアメリカを実に羨ましく思った。

ヘイゼルにうながされ、又引き止めて話をつつけようと云う校長先生に挨拶して各、クラスを一寸ずつのそいて歩いた。かわいい六年生位の一生徒がかしまった態度で案内に立つ。どの部屋へ入っても「失礼します。この方に一寸参観させて上げて下さい」とヘイゼルの紹介に或るクラスでは先生が一人の生徒をよび「貴女のお国の方に握手なさい」

と声をかけた。みれば日本の女の子。恥しうに手を出す。「今日は」と私は手をにぎった。他の子達はとても羨やましうであつた。或るクラスでは先生が「皆さん、この奥さんのお国を知ってますか」「ハイ」と云つて何人かが手をすぐあげた。一人がさされると「日本の人」と答えた。「どうして分りますか」「ハイお人形をもってます」と云つた具合でどの部屋も小さいかわいい子達にあたたかく迎えられたのである。

音楽室では二三の歌をうたってくれた。涙がにじんで来た。感激やの私には、アメリカ本土の一小学校でお客様の私にクラスでうたをきかせてくれたその心持に胸があつくなるのであつた。歌の上手下手ではない。その突然の訪問客に先生がすぐあたたかくむかえ様とするその態度にうたれたのである。もし声がよく呼吸がつづくなら、日本の童謡の一つでもうたつて上げたかつた。私も私の知っている歌の時は一緒にうたつた。これが特に小さい子達の心に残る。他国からのお客様としての大切な態度であると私は信じていたのであつたから。大勢ではなくも何人かの子供さんに

親しく会えた私は、大人なら話して分りあえることでも、子供さんは話よりも態度から感じる第一印象が大切である。私はこの事は始終心ふかく考えていたことである。



ブロンクスビルの公立学校の一つ。

もう一つの学校では、幼稚園で（あちらは小学校に附属してあるらしい）やはりうたをうたっている所へ入って行った。ピアノをひく先生のまはりに生徒が集っていた。「今晚ハ」と先生は日本語で挨拶して「今晚はでよ

いのでしよう」と笑い乍ら、得意げである。そしてそれで正しいかとききなおした。私は笑い乍ら「今晚には一寸早すぎますよ。今日は」の方がよいでしよう」と云つて上げると先生又々「一つおほへましたよ」と大笑い。そこでもその先生が「どこの国の方でしよう」ときくと二三人日本と知っていた。そしてやはり日本人形をもつてると答えていた。着物をそつとさはってみる子。皆「ありがとう御元気でね」と立去る私に、小さい手をバイバイと振っていた。お人形を通して知った日本と云う国から来た一人の女の子の人を、目のあたり見、着物をさわったりしてみたりした。無邪気な子供達は、家へ帰ってお父さん母さんに今日あつた日本人の事をどんな風に話しかせてくれる事かしら。

外へ出るとそろそろ帰宅する子供達をけがない様にとその時間だけ見守る警官が一人学校の前の四ツ角に待機しているのをみかけた。「参観ですか」とニコニコと声をかけたおまわりさんにヘイゼルは親しげに挨拶し、私はスマイリング外交の微笑を残し車へと急いだのである。

スクールバス

ブロンクスビル、マウントバーノンをエリザベスの運転で買物に行ったりした時、よくスクールバスをみかけた。小学校、中学校の生徒をのせて送り迎えをするのである。スクールバスが一度止ると後に続く車は全部皆止ってしまふ。追い越し禁止の爲である。ある日、町角で女学生と見える一グループの中でタバコをすっている生徒をみた。エリザベスに未成年者がタバコをすっているけれど、注意する人はいないのときいてみた。「残念な事にニューヨーク州ではその法律がない」と云う（各州で法律がちがう事がある）。私は日本では未成年者がタバコをすうのをみれば警官はもとより学校でもとりしめる話を話した。エリザベスは本当に残念であると云っていた。私は「あの女学生もスクールバスへのもの」とたずねると「イエース」と云う。幼稚園や小学校へ行く小さい子達なら全部の車を止めて安全を保つ事は必要だけど、タバコをすえる一部の成人ぶっている女学生の爲に、これだけの沢山な車が全部ストップして

しまふのはおかしいと笑い乍らエリザベスに云うと「本当にそうだ、シカタナイ」と云って笑った事である。

「ストップしている間に、もし救急車や、消防車が後から来た時どうなるの」って、心に思い出たままエリザベスにたずねると、「私を困らせる事ばかり治子は質問して来る。今度よく調べておいて上げましょう」と大笑いになってしまった。マリオンとフロリダ一周の旅行中もこのスクールバスにしばしばぶつかった。

「治子みてごらんなさい」と云われふとみると、バスの運転手は主に婦人であった。奉仕しているのか、アルバイトしているのか、うっかり聞くのを忘れてしまったが、道路を走る車の王者の様な感じをもたせたあのスクールバスに、子供を大勢のせて一般の人の車のしつ駆する中を「子供の安全第一」を考えるアメリカでは運転する婦人ドライバーも私には一段とえらそうに見えるのであった。朝と午後と出勤すればよいのだから、運転はお手のもののあちらの婦人達にとっては、らかな仕事かも知れない。

やはり南部の州のある町はずれでスクールバスが二台もわきの道から、幹線の道路へ走って来るのを見ると、二台も次々に止られては大変とマリオンはそのスクールバスに先を越されない様に少しスピードを早めることもあった（スクールバスは茶色に黒の線が入っているから一目で遠くからでも分る。）道路の上は「スクール」と大きく黄色で書いてあるのは東京で見ると同じである。ジョージア州であったか「学校地帯速度十五マイル」とかいた札が立てられていた。六十マイルで平均走っていた何台かの車車が急にスピードを十五マイルに落しノロノロ走るのは異様な風景であった。その地区を過ぎるとさっとスピードを早める。子供を交通事故より守る事は、至る所徹底してきびしい。

南部では、やはり日本と同様子供が肩から弁当のベルトの様なものをかけ、道路を横ぎる小学生の安全を計る為立っているのをみかけた。ただしこれは交通の激しい所とちがい、フロリダへ行く途中ジョージア州あたりの綿畠の多い、いわゆる農村地帯と云った町でみた一風景である。

表紙の写真

不気味な形相

京都 神護寺

空気のよい都として知られる京都でも、仁和寺を過ぎ宇多野にさしかかると一段と新鮮さを増す。有名な北山杉の林をめでながら登るトロトロ坂も情緒があり、若いアベックでなくとも疲れをいやすに十分である。

紅葉の林をぬって急な坂道を下ると、名の通りに美しい清滝川が待っている。朱塗りの橋を渡るとカギ型の急な石段。あえぎながら上って三門を見た時の気持はまさに救われたの一語につきる。腰を伸ばして一ブクがてら由緒を読み、三門より一步中に入ると、極楽を再現したのではなからうか、という明るい



中にもどこか荘厳な感にうれたる。まして天下の絶景である紅葉の時はなおさらである。

ここはもと和気氏の高雄寺であったが、永い間荒れはて、鎌倉時代の初めに文覚が再興し、その後盛衰はあっても神護寺となつて今日に至っている。建築の大部分は江戸時代のものであるが、仏像類は平安初期の代表的なものが多い。表紙の薬師像もその一つで、本堂に安置されている。

薬師像にもいろいろあるが、神護寺の薬師像ぐらい厳しい顔をしたものはない。高く厚く盛り上ったみことな肉髻と螺髪、その丸さに対して眉から鼻すじへ通った稜線の鋭い切れ。厚い眼ぶたと中半開いた瞳のかがやきには思わず目をそらしたくなるような烈しきがある。いかにも頑強そうな鼻と、キリッとした口もととはそれに一層の輪をかける。眉間をはじめ、右眼など、顔中にできた数本のさけめは、いかにも力がありあまつてはちぎれたというような形容があてはまるだろう。それは単に顔面のみならず、肩巾の広い肥満した軀軀、とりわけ太く横に張った腰から股にかけてのモリモリした肉どり、土用波のように雄大な烈しい表現をみせる衣文のヒダ、どれ一つをとってみても素晴らしい迫力にみな

ぎった堂々とした重量感。確かに平安初期を代表する名作の一つといつて過言ではない。東方の浄土にあつて、人々の心身に災するすべての苦悩を力ずくでも癒すにふさわしい仏像でもある。

平安時代になると、最澄・空海などが入唐して深奥な教理の密教が始められるようになり、信仰の対象となる仏像も、奈良時代に要求された南都の顕教諸派とは別な雰囲気をもすようになった。これはあまりにも理想の美を追うことにのみ走りすぎ、精神面に不満を感じるようになった奈良様式に対して、必然的に起つた反動でもあろう。そして従来の優美さに対して烈しさを、写実にかわつて尊厳さと超然性を求める結果になつて行つたのである。この像も唐末の流れをくむ代表的なものではあるが、そこには木彫像としての自覚が明確に示されている。

幸福をカワラケに托しながら、つぎつぎと深い谷川に投げ込む庶民の姿を抱擁するかのよう、薬師像は不気味な形相を続けながら見守るであらう。

鈴木成元



近代高僧伝

渡辺海旭

大橋 俊雄

明治大正の浄土宗を背負って活躍した僧たちの多くは尾参から越前にかけての、所謂仏教王国ともいはれた土地からでた人達であった。その中に生粋の江戸っ子がいた。その人こそ明治五年正月渡辺啓蔵の長男として、浅草田原町に呱呱の声をあげた海旭その人であり、幼い頃父を失った彼は十三才の時博文館の小僧となり、車夫をするなどして母妹の面倒をみながら、家計をたすけるために献身の努力をしたが、縁あって間もなく小僧生活にみきりをつけ、小石川源覚寺の門を叩き端山海定の弟子となった。一寸した角髪で顔幅もあり、色は浅黒く、眉毛は太いし眼は大き

く、口を真一文字にきりっと結んだ彼は見るからにしっかりした少年で、従って師海定も彼の将来には大きな期待をよせていた。教校から大学へ進み、卒業後内地留学生を拝命したときも、彼は常に望月信亨や荻原雲来等と机を並らべ良き競争相手となって勉強し、どちらかといえば天才的なひらめきを見せ、特に語学に秀でていた関係で明治三十三年五月には浄土宗門の初めて試みた第一期海外留学生に選ばれ、雲来と共にドイツに渡り、ストラスブルグ大学でロイマン教授について、比較宗教学を究めることになった。教授の許でひたすら梵蔵巴の仏教聖語を学び、且つ漢訳

仏典を読むことのできる強みは、到底ヨーロッパ人の追従することのできないものとして、欧州学界に重きをおき、孔雀王経の研究などいくつかの注目すべき論文を世におくった。そして在独いつしか十二年を閲したが、そのうち前六年は専ら研究室にこもっての研鑽であり、縮冊大蔵経の如きも手垢だらけになつてしまった程の精進ぶりであつたらしく、其の後半は対外的に活躍し、カイザーウィルヘルム大学その他で仏教哲学や印度学を講ずるまでに、彼の学問は学界の認めるところとなつていた。しかし在独中の彼にとって傷心やるせなかつたものは、彼にとって最も親愛の情こまやかであつた師僧と母の兩人を失つたことであり、そのため何かの会合の折、余興一つたのまれた時、「今日は母の命日だから勘弁してくれ」と泣かんばかりに断つたというのも、師や母に一しお愛着の志をおび、追慕の情殊に深かつたからであらう。曾つて徳富蘇峰が彼を評して「現代的仏者なり、行誠以後の第一人者なり」といい、インドの志士ビハリボースが、「坊さんは世にさらにある。衣を着たら坊さんになれるもの

と云う考えが沢山ある。心の坊さん、知識的にも行為的にも、本当の坊さんは先生のみであつた」といつているのも、学徳共に秀いで

た彼の人物評としては蓋し当を得たものであつた。朝は四時に目をさまし、自から戸をあけ放つてお勤めをされるのが常で、同宿の人の中には「全く野っ原に寝ているよう気がしたよ」と述懐していた人もあつたというが、朝の早いのは無類であり、睡眠はほんの三四時間位しかとらず、勤行後は書斎の人として藏経をひもどき原典を調らべるなど、一日として研究を捨てられたことなく、又生涯を不犯の生活で通された。明治維新によつて仏教界の綱紀はゆるみ、規律は混乱するなどして、宗門に戒脈はあつても、それはただ名のみで戒法はたまたれてはいない。仏教が真にあるべき姿において僧が人の師表となるためには、現代の仏教思想にマッチしたものでなくてはならないと痛感し、このような立場に立つて「右手を挙げては常に時代思想の応同を指示しつつ、左手は直に復古主義の戒律を揚げんとす」と述べ、新戒律主義を提唱した。そして自から禁酒禁煙を守り、妻帯しな

かつたが、大の美食家で野菜果物の一切をしりぞけたのは何が故であつたろうか。

昭和四年仏教学協会を結成し、同七年高野山大学で原始密教学を創構し学界に新分野を開いたが、彼の学界にのこした最大の功績ともいうべきものは、大正十一年高楠順次郎博士と共に全国の名山古刹の奥深くに蔵している一切経をくまなく調査し、その結果校合出版しようと発願し、十一ヶ年の歳月を閲してようやく昭和七年五月完成された「大正新修大藏経」正統合せて八十五巻の完成と、これに引続を小野玄妙博士と協力して行つた大藏経別巻圖像部の刊行であつたろう。

又広く国際人としてヨーロッパ、アメリカ、インド、ビルマ、シナ等々の有名無名の人達とも交際をもち、彼の住職地であつた西光寺には何時でも此等の国からの来訪者があり、誰いうとなく「国際テンプル」と呼ばれていた。レヴィ博士をたすけて日仏協会を結成し、ベツオールド教授と結んで日仏教会をつくり、ロシアのローゼンベルクに協力して日露辞典を完成するなど、国際社会を舞台に華やかに活躍もしたが、彼の最も困惑したのは

尼僧にしてくれとせがんで止まなかつたエルゼ嬢の来訪であつたという。

学問研究もやれば、社会事業にも専念する。詩人でもあれば文筆家でもあり、その文たるや極めて名文で、原敬首相が遭難したとき増上寺で読んだ彼の追悼文を聞いた、時の通信大臣望月奎介は「あんな名文で読まれると私も一度死んでみたい」ともいわれたというエピソードさえ残されている。そして信仰の人であり、事業家でもあつた彼は行くとして可ならざるものはないという始末。その海旭も昭和八年の元日当時校長として在職していた芝中学校の拝賀式の講壇でたおれ、これが原因となり敗血症のため一月二十六日、六十二才を一期に逝去された。奇しくも其の前日、朝日新聞社は「大藏経完成の功績をたたえ朝日賞を贈つてその功に報いたが、授賞式のさ中危篤の報を受けた高楠博士はとるものもとりにあえず病床を見舞い、賞牌をとり出して榮譽をわかれたが、既に意識不明であつた。寂するに及び宗門は大僧正を、政府は正六位を贈り生前の功を嘉せられた。法名を無量光院明蓮社諦普上人善阿壺月海旭大和尚という

浄

土

宗

入

門

その四

往生の意義について

戸松啓真

(大正大学助教授)

往生ということは、前にのべたようにわれわれがこの世の生を終つて、西方浄土へ生れることであり、それがためには念仏を相続して申すというのが、念仏往生の教えであることとはいうまでもない。それ故法然上人が八十才、死の直前に門弟に残された最後の教えである一枚起請文の中にも、「ただ往生極楽のために、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思ひとりて、申すほかには別の子細候わず。云々」とのべられているのもそのことをいうのである。ここで往生についてもう少しのべたいと思う。

現代に生きる人々は、往生ということが、われわれが住んでいる美しい日本の国のよう

に、或は将来更に科学が進歩して誰でも行けるかも知れぬ月世界と同じように、西方十萬億刹の彼方に極楽世界が実在し、その国土は三部経に説く如く金銀等の七宝をもつて合成され、美しい池、七宝の樹林があり、極楽の鳥が飛ぶというが如き実在の世界へ生れることと考えるであらうか。恐らくは、そうではあるまいと思う。というのは、念仏往生の話聞いた者が、たいがいそれでは極楽は本当にあるのですかとたずねる。これはその問いかけの中に、既に否定の氣持を含んでいるのである。

先日も都立駒場高校の三人の女子高校生が来て、学園祭で私達は高校生の実態を調査し

て発表したい。私達は信仰について担当したので、仏教について聞きたいが、浄土宗の教えでは私達の死後本当に浄土に生れるというのですか。また人間がこの世に生れて来たのは何のためと説くのですか。浄土へ生れるためですか等々きりが無い。それについていろいろ話したのであるが、彼女達が求むる答えは、浄土に生れるというからには、要するに日本の国土が実在するように、浄土とか阿弥陀仏が時間的空間的に実在するものでなければならぬのではないかということである。しかしこのことについては、既に曇鸞大師が往生論註に

「かの浄土はこれ阿弥陀如来の清浄本願

の無生の生なり。三有虚妄の生の如きには非ざるなり。」

とのべているように、われわれが一般常識でいうような時間空間的な実の生実の滅ではなく、無生の生であるといっている。また善導大師は、

「弥陀の浄土は無為涅槃界なり」△法事讃V
といい、

「極楽の莊嚴は三界を出て、人天雜類等
うして無為なり」△法事讃V

といい、また

「四十八願より莊嚴起る」△往生礼讃V

といっているのは、往生浄土の形式をいうのではなくて、その意義とか実義、或は往生の本質をのべたものであろう。

従つてこのように浄土とか往生の実義を展開すれば、浄土はわれわれが時間的空間的に実在するといふようなものでもなく、往生はわれわれが一般にいう此処から彼処に行くといふようなものではないのである。浄土は三界を超過したものであり、しかも仏の大慈悲より全露した衆生を救わんといふ本願心によつて莊嚴された世界である。それは仏の両面即ち

智慧と慈悲のあらわれであり、「第一義諦妙境界の相である」△往生論Vともいわれ、「この浄土は法性に随順して、法本にそむかず。」△往生論註Vということになるのである。われわれがかたちあるものに心を任して、それを求めることがそのまま法性真理にかなうのである。聖閻禪師が、

「この指方に即してしかも無方なり。この立相に即してしかも無相なり。往生の見を改めずして、当体すなわち無生なり。これすなわち仏意この功を開き、仏願この益を与う。しからばすなわち事相全く理性なり。見生全く無生なり。すなわちこれ仏意不思議の教門なり。」△釈浄土二藏義V

というのもこの意である。しかし、往生の実義が阿弥陀如来の清浄本願の無生の生でありそれが真実性であるとするならば、何故に西方に極楽浄土をかまえて、往生を説くのであろうか。それに対して善導大師は次のようにいわれている。

「諸仏の境界をたずぬるにただ仏のみよく知りたまえり。国土の精華は風の測る

ところにあらず。三身の化用みな浄土を立ててもつて群生を導く。法体はことなることなし。有識これに帰して悟りを得。ただし凡夫の乱想寄託するに由なきがため故に、釈迦諸仏慈悲を捨てず、ただちに西方十万億刹を指さしむ。国を極楽と名づけ、仏を弥陀と号す、現にましまして説法したまう。」△法事讃V

仏教では仏のことを法性法身というのであるが、衆生を導くために諸仏菩薩となり、それぞれの浄土を立てている。しかし法事讃にのべているように諸仏の法体はことなることがないので、有識の者はこれに帰して悟りを得るのである。しかし、乱想の凡夫即ちいろいろな迷いのために心の乱れているわれわれは、一々生即無生の理を明らかにして悟りに入ることがむずかしいので、「釈迦諸仏は慈悲を捨てず」という如く仏の慈悲心によつて西方極楽浄土が建立されたのである。われわれ衆生としては実に死し実に生ずと思つて浄土往生を願つていても、往生の実義にかなうのである。それは仏の大悲の方便、無上の方便だからである。この方便といふのは、一般

に使われているような目的を達するための手段とか過程という意味ではなく、「方便即真実」の方便で、方便がそのまま真実になるものである。往生論註に「彼の仏国は即ちこれ畢意成仏の道路、無上の方便」というのもこの意味である。これについては、なお説明を要するが、今は略するとして、「韻高ければ、和するもの自ら少なし」といわれるように、何人もこの往生の本義を諦めなければならぬ。いとなると、それは聖道門と異なるところがなく、万人のために開かれた浄土教の意義がなくなってしまうのである。法然上人も

「弥陀如来の国土を莊嚴したまいしも、衆生を引撮しやすからんがためなり。」

△三部經大意Ⅴ

といわれ、また弟子に語られた御言葉の中に、往生のためには念仏が第一であって、学問は必要がない。しかし念仏往生を信じるためには学問をせよといわれている。味い深い言葉である。

これまでのべたように、浄土とか仏というもの、この世界と同じように存在するものではない。だからといって極楽や阿弥陀仏が

ないというのではないのである。第一義諦の妙境界の相として、或は法性顕現の妙相として、或は有相即無相の相として、われわれにとっては厳然としてあるのである。それは架空の物語とか、夢想や幻影から区別さるべきものである。されば法然上人が八十才の最後に残された御言葉の中にも、往生のためには、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべしといわれたのである。このような存在は絶対的實在、高次の實在といわれるもので、宗教的体験の本質は「何等かの意味に於ける高次の實在との深き交渉を得ることが第一義である。△宗教の真理Ⅴということにあるので、往生もまたこのような意味から体得されるものであろう。

さて話は前に戻るが、三人の高校生という話した際、話を常識的にするために次のたとえをあげたのである。

ここに美しい花がある。しかし私はこれがその花の「美」だとり出してあなた方に示すことは出来ない。しかし私もあなた方もこの花は美しいと思う。風景の美しさも同じである。高い山の頂上に登って周囲を見下した

時、そこに美しい風光が展開している。しかしこれがその美だを取り出すことはできないけれども、その素晴らしい美しさは厳然として眼前にあるのである。また私達は雨の音を聞くという。家の中であなた方と私が話している時、バラバラと雨の音を聞いたので、雨が降って来たなと思う。しかし雨の音などは何処にもないのである。それは雨が八ツ手の葉にあたる音である。雨の音などはないが、私達は雨の音を聞くという。比喻としては不適當であるがこのような気持で宗教を考えていたらどうだろうかなどいろいろ話したのである。丁度用事があったので一時間位で帰っていたのだが、三人の女子高校生のうち、二人は「大体わかったような気がする」といったが、一人は「やっぱりわからない」という。今の若い人は全くはつきりしている。このような人達が仏教をどのように理解し、仏教についてどの位関心があるのか参考になると思うので駒場高校の学園祭に発表されていた一部をあげてみよう。

編集後記

▽先頃亡くなられた吉川英治さんを赤坂新坂町のお宅に二度程お訪ねした。一度は講演を、もう一度は浄土誌に「法然上人」について御執筆いただくためであった。折悪しく、その頃丁度「私本太平記」の連載たけなわで編集部の企画は実現出来なかったが、時改めて考えて下さるとのことであった。あとで吉川さんが、「親鸞聖人は小説化したり劇化はしやすいが、法然上人は書きにくい。御自身は持戒堅固であられながら、身を沈めた人間以上に人間のもつ本性を洞察された人であり、そのぎりぎりの厳

しい内面的な苦悩をあらわすことは容易でない。しかし一ど書いてみたい。」といわれたと秘書の方より伺った。吉川さんの胸中には法然上人の人間像をきわめたい気持ちは充分あらわれたことであろう。もうできないのは誠に残念である。▽東京養老院の川瀬院長のもとに、二人の若い法学士が、この事業に参加している。寺出身ではないが仏縁は深く専門の学問は勿論本格的に仏教の勉強をしながら養老事業に挺身している。この方より念仏の現益論をうかがった。それは最初入院する人は、顔色もすぐれず気持ちも不安定で老人特有の愚痴が激しい

が、一、二ヶ月すると精神状態が安定し、それに何より血色がよく老人ながらツヤもでてきて健康的になる。食生活は決してよくないが、その原因と考えられるのは、朝夕の念仏とおつとめである。又、臨終の際にも、熱心な念仏信者は、最后非常に安らかに息を引とっていく—ということである。今后丹念に蒐集されるデータにより、念仏現益の確証が科学的に裏づけられることであろう。

(宮 林)

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十七年十月廿五日 印刷

昭和三十七年十一月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿一

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

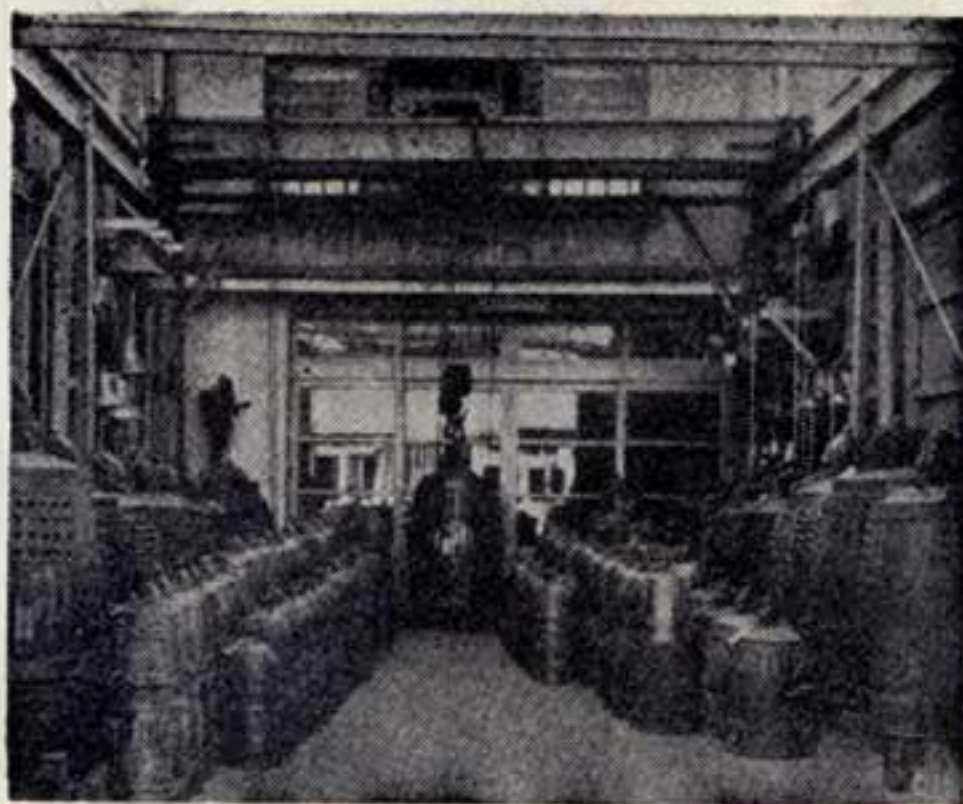
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



鑄物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 341 8847番 本社工場 高岡市横田